

ミッドナイト・コール

和田信子

もしもし、千枝子ですが。
ほうい、千枝子さん。

友木のハイは、ほうい、に聞こえる。いつだって機嫌よく弾んでいる。弾んだあとに、こちらの様子を窺うようにふっと黙る。

受話器の向こうの友木に、もっと近づきたくて音量を大きくする。電話機から零れるように聞こえてくる声に、ようやく安堵する。

対面して話すときはそのままの声で充分なのに、電話の声には食欲になる。人は声だけで話しているわけではなくて、顔が見えているときは身振りや表情で補っているから満足度が違うのだろう。

千枝子さん、今日も一日お元気でしたか。

はい、ありがとうございます。

体調はいかがですか。

ええ、まあまあねえ。今日も血圧が低かったの、眩暈がして、ちょっと驚いたけど、いつものことだから……。

電話機に表示された通話時間は三分三十四秒を過ぎた。そろそろ終わりにしようと思う。

のために記入している。

このほかに、室内家具移動、電球取替え、浴室清掃、河畔ドライブ……、先月、友木に支払った代金だ。

すべて時給なのに、ナイト・コールだけは分単位で、一分で百円が請求される。言われるままに払っている。

友木とは、夫が事故死したときに千枝子の代わりに上京してもらって以来のつきあいだ。

千枝子は大腿骨折で入院中、手術の前日だった。まったく動けない仰臥状態のときに友木を紹介してくれたのは、病室を清掃に来ていたおばさんだ。

なんでも請け負ってくれますよ、私の古くからの知り合いの甥なんですけど。便利屋っていうんですかね、このごろ始めたんです、いえ、会社なんかじゃありません。一人でやっています。大手の電器メーカーに勤めていたんですが、転勤ができない事情で会社を辞めたんです。それで便利屋になったんですよ。人柄はいいです、間違いないです。

おばさんが太鼓判を押した。

「私はこうして病院で働いてますからね、まあ、事故や怪我は別に珍しいことではないですけど、奥さんが入院中にご主人が交通事故で亡くなるなんて……」

ベッドの下にもぐらせていたモップを引き抜くと壁に寄せ、おばさんは立ったままのその位置で、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏……、と小さな声で呟き合掌した。いつもはお喋りなひとのようだが、さすがに言葉をつまらせてモップを引きずって出ていった。

遠く離れた東京での自動車事故は、歩行中だった夫を撥ねたあと、車が電柱に激突して、運転をしていた男も即死だったという。

看護師長から手渡された電話の子機を取り落としそうになり、横から支えてもらった。電話は板橋警察署からで、夫の死亡が告げられた。驚きの方が先で、まだ哀しみがついてこないのに涙はかつてに溢れてきた。

あの前後のことは、一部消し飛んだように記憶が途切れ、接続の悪い電波のようにときどき繋がる。

低血圧は本態性のものだ。友木に訴えなくても心配のないことくらい判っている。血圧の話なんかしてもしょうがないのに、友木の声を聞きたいだけで喋っている。

脳の前頭前野を支配されると振り込め詐欺にあいやすいと、テレビの番組でやっていたのを見たことがある。取るに足らない話だとわかっているのに、ただ声が聞きたいと思うのは、すでに脳のどこかの部分が支配されているのかしら。

「あまり夜更かしをすると身体に毒ですよ、そろそろお休みになりませんか」

「そうだね、友木さんの声を聞いたら安心しました。夜はなんだか胸騒ぎがして苦しくなるの、こうしてお話していたら落ち着きました。ありがとう」

「では、おやすみなさい……」

それが友木の癖で、語尾を低くのばして電話は切れた。

有料のナイト・コールが終わり、電話台に備付けたメモ用紙に、四分二秒と書き留める。月末、友木からの請求書が届くので、そのときの確認

上京してくれることになった友木が慌ただしく病室の千枝子を訪ねて来て、仰臥したままの手を支えてくれ、いくつかの書類にサインをした。間近で覗きこむように見た友木の目は少年のように臆病そうで落ち着きがなかった。四十近くと聞いていたが、気弱そうなこの男に夫の死の後始末を任せるのかと、身動きできない我が身が不甲斐なく、声も出なかった。そこからまた記憶がぶつんと折れたように落ちる。多分、夫の死を告げられたショックを和らげるために、その日、処方された精神安定剤、翌日の手術中の麻酔、その後に続く手術後の鎮痛薬の影響だろう。

いきなり遺骨を抱えた友木に繋がる。

看護師長の好意で、術後三日目の身体を一泊だけ個室に移してもらい、そこへ友木が、大きな布製のバッグを提げておずおずと入ってきた。

一人部屋の病室にはソファとテーブルがあり、そのテーブルにいかにも重そうなバッグを友木が置いた。それからいったん入口に戻り、後ろ手にその扉を閉めた。観察が必要な病人のために、それまで扉は開け放たれていたもので、急にしんと静まったような室内でバッグのジッパーを開ける音が、裂くように響いた。

中から木綿の唐草模様が覗き、その風呂敷をどけると、さらに白い布地に包まれた骨箱が現れた。

友木はその布の一方をはらりと広げた。桐の木の匂いが微かにして、木箱の片隅が覗いた。

「東京の骨壺は、よその自治体のより大きいんだそうです。骨灰、全部残さずに持ち帰らないといけなくて……東京はやっぱり世知辛いところですよ」

千枝子は物も言えずにいるので、友木が気を遣うように一人で喋った。「中を確かめられますか」

四隅の布が除けられ、桐の箱の上蓋を友木が軽く持ち上げると、白い陶器の縁がちらりと見えた。

「いえ、あとで」

急いで首を横に振った。骨箱の中の骨を見たら、夫の死を確かなものとして受け入れなければならないように怖かった。

まだ信じたくなかった。友木がいなくなったら一人でひそかに開けてみ

ようと思ひながら、ベッドの上からテーブル上のバッグを見ていた。
一人部屋とはいえ、人の出入りは避けることのできない病室に、あからさまに骨箱は置けず、友木が運んでくれた辛子色のバッグをそのまま借りた。

ひそかに開けて見るそのときを一刻延ばしにしているうちに、骨に触れている夢を見ていた。うつらうつらしながら、手術で外された自分の大腿骨頭と、夫の太い脛の骨を抱いている夢だった。

目覚めると、扉の外の廊下はすでに慌ただしく人の行き来する朝の気配がしていた。

昨夜おそくに飲んだ鎮痛薬の効果が薄れたのだろうか、腰から下が猛烈に疼いた。

ノックの音がしたので、約束していた友木がもう来たのかしらと、はい、と答えた。

入ってきたのは看護師だった。他の病棟からの応援か、あるいは休暇でも取っていたのか、千枝子には見覚えのない若い女性だった。

「リハビリは……」と言ひかけ、彼女は、ワゴンに乗せてきたパソコンの画面と千枝子の顔を交互に見比べた。

テーブル上の骨箱のことは聞いていないのか、何も言わない。

師長さんは？ 千枝子が訊くと、今朝は研修で出張、病棟に来るのは午後からだという。

ベッドからテーブルまで手を伸ばせば夫の骨まで届きそうな距離だ。起きるのを手伝ってもらい、触れてみようかと、あの……と呼びかけた。

体温計を見ていた看護師が、はい、と顔をあげ、いきなり、昨日のオシッコとお通じの回数は、と訊ねた。

虚を衝かれ、ああ、たしか、あの……。狼狽えながら、七回と……、お通じは、ありませんでした、と小さな声で答えた。

カンシヨクは？ との問いに、まったく食欲がないのに、間食なんかするわけじゃないか、と返事も出来ずに黙っていた。聞こえていないと思われたのか、さつきよりも高い声で、お食事、全部食べましたか、と問い直された。

こんな時だというのに、ここでは全部食べることを完食というのだった

ことよ。うちあたりでそんなことをしたら、お坊さんが呼べなかったと言われるのがせいぜいだから、そんなわけにはいきません。

しかし、友木に引き取りに行ってもらい、遺骨が戻ってきてても、千枝子はまだ入院中で動けなかったし、親戚と呼べるのはこの兄だけで、彼は、自分はお別れはすんだから、あらためて九州まで行くのは遠慮させてもらいたいと言ってきた。

千枝子には青森に妹が一人いるが、脊柱間狭窄症で出歩けない。もう十年近く顔を合わせたことがない。

一番知らせたい一人息子の遼とは連絡がとれない。どこにいるのか、あの子は二十歳のときから行方知れずである。むろんこれまで八方手を尽くして探した。新聞の尋ね人欄には毎年彼の誕生日に、連絡待ちます父母、と載せ続けた。いなくなつてから十二年と三ヵ月がたつ。

今回、夫が東京へ行ったのも、遼を見たという人に会うためだった。

庭石に躓いた千枝子が、大腿骨を骨折して三日目、家で電話を受けた夫が千枝子を見舞いに来て言った。

「遼の情報にはもう何度も振り回された、上京はあんたの手術が無事にすんで、歩けるようになってから考える」

救急車で運び込まれても手術室も医師のスケジュールもつまっていて、手術は十日先が予定された。それまで抗生剤と鎮痛剤を投与されながら身動きもならぬ状態だった。

東京からの電話は、遼と同じ予備校に通っていたことがあり、今は小劇団で芝居をしているという男からだったそうである。

芝居がはねたあと、客の見送りに立ったロビーで遼と話したという。遼だろう、と呼びとめたら、人違いでしようと笑ったけど、あれはきつと遼クンだと思ひます。ちよつと痩せたかなつて感じだったけど、遼クンも予備校をやめたあと、シユールな芝居に首つっこんでたことがありましたから……って。

「え、そうなの？ シユールな芝居ってどんなのかしら」

千枝子はベッドの上の顔を夫の方に向けた。

「芝居が好きだなんて、一度も聞いたことなかったなあ」
夫も憮然とした顔で天井を仰いだ。

と思ひ出した。ほんとは、ほとんど食べていなかったが、半分くらい……と言つた。

いまの数値を、指捌きも鮮やかにパソコンに入力し終えた看護師は、ワゴンを押して出ていった。

これで、骨をあらためる機会を逃したと、言い訳のように千枝子は思ひ、そのことにどこかほつとしていた。今はまだ信じたくない甘えを自分に許しておきたかった。

看護師と入れ替わるように友木がやって来た。

病室にいつまで骨箱を置くわけにも、誰もいない自宅へ戻すわけにもいかなひ。友木が彼の知り合いの寺へ預ける手配を調べてくれていた。

事故直後の現場へ身元確認に向ひてくれたのは、八十六歳になる東京在住の夫の兄だ。損傷の激しかったという遺体の火葬は、この兄と友木が葬儀社や役所と対応してくれた。

いま、焼き場から戻ってきたと、夫の兄が電話をかけてきた。

千枝子さんが元気になるまでこの骨を預かつてあげられるといいのだが、自分は肺氣腫を患っている、私も明日がわからない。実のところ、あれがほんとうに弟だったかどうか、顔は見えていないんだ。包帯でぐるぐる巻かれていたからね。でも、右足の甲にある傷跡でわかつたよ、あれは子供のころ私と遊んでいて怪我をしたときのものだ。

夫の兄は生涯独身で都営のアパートに住んでいた。

東京へは夫と二人で何度か行つたことがあるが、その都度、ホテルをとり、兄のところに泊ることはなかつた。何年か前、空港へ見送りに来てくれて一緒に食事をして以来のご無沙汰だ。

電話口で義兄は言つた。

遼に知らせることはできないのか。

息子の遼と連絡が取れるくらいなら義兄さんに頼みはしなかつたと胸のうちで思つたが黙っていた。

夫は常々、おれが死んでも式も戒名も不要、と言つていた。千枝子はそのたびに嗤つた。

何を気取っているの、そんなことは、よほどのお金持ちか偉い人がいう

遼の連れらしい女が小走りについて行つたけど、あの女となら連絡がつくかもしれません、たしか、来世の生まれ変わりを説く何とかいう教団の布教に熱心な女です。

電話をかけてきた男は言つたそうである。

会つてきてちょうだい、私は大丈夫。

夫に上京を勧めたのは千枝子だ。手術までにまだ七日あるわ、それまで、ただベッドにじつとしていられだけ。手術の前の日までに帰つて来てくれたらいいわ。遼を忘れずに私たちに電話をくれた友だちに会つてきてちょうだい。どんな些細なことでも知りたいと伝えてきてほしいの。私たちの思いが、どこかで遼に繋がるかもしれないわ。

それが、夫まで失う結果になるとは夢にも思わなかつた。

夫は、あんたの手術が終わつてから、と言つた。あのとき上京を勧めなかつたら、偶然、暴走してきたその車に撥ねられることはなかつたはずである。あのとき、ああ言わなかつたら、と胸の奥を噛むような悔やみを、無理やり蓋をするようにねじ伏せる。

遼と暮らした長崎の家は、夫の転勤で福岡に移つたあとに誰にも貸さずそのまま空けてある。

いつ遼が帰つて来ても移転先が分かるように、福岡の住所を何枚も墨書して玄関を開けてすぐの正面、居間の壁、トイレのドアに貼り付けてきた。

鍵は昔のままの約束事で灯籠の中に隠してある。

夫の定年後は長崎に戻るつもりでいたが、彼には心臓の持病があつた。長崎の家は坂の上だし、福岡で巡りあつた相性の良い主治医のいるこの地に退職後もどまつた。

長く暮らさなかつた福岡では、夫の死を心から悼んでくれる人も思ひ浮かばない。会社を辞めたあとだつたから仕事絡みの義理で人が押し付けてくるということもなかつた。ほんの数人に事情を知らせて、骨を預けてあるお寺に回つてもらつただけで、千枝子は病院のベッドで夫の四十九日を迎えた。

図らずも夫が望んだ葬式不要を実行できたことになる。

リハビリを含めて三ヵ月かかり、ようやく退院すると、家の周り、庭といわず裏といわず、ところかまわず草が勢いよく伸びていた。千枝子と夫が丹精していた花壇を縁どる煉瓦も、草に蔽い隠されて見えなくなっていた。

遑が居ないことにはそれなりに馴れていたが、自分が入院するまでここにいた夫がいなかったことを納得するのは難しかった。

夫の姿を家の中に探した。杖にすがり、壁伝いに、寝室、書斎、トイレと、すべての扉を開けてまわった。閉じ込められていた澱んだ空気が、微臭く漏れ出し、たちまち息苦しくなった。

しんと物音のないキッチンに立ち、鈍く乾いたシンクと水道の蛇口を見ていると、喪失感に身体が震え、倒れそうになり、慌ててシンクの縁を掴んだ。

病院で遺骨を横に置いて寝たあの日より、夫の死は、はるかに身近でやりきれなかった。

棚の上の夫が開封したボトルからウイスキーをほんの少しグラスに垂らし、気付け薬のつもりでひといきに流しこもうとしたら、噎せて、ついでに酸っぱい胃液があがつてきて吐いた。

退院にあたっては介護の認定を受け、帰宅後はヘルパーが派遣されてきたが、荒れてしまった庭の手入れまではしてくれない。限られた時間内で命に直結する食と住だけが彼女らの仕事のようで、それ以外、草一本抜いてくれない。

どうせ食欲もないのだから、調理の手間をほんの数分だけ省いて、その分、門扉の脇に目立つ草を引いてはもらえないかしら、と小さな声で頼んでみたが、決まりですから……、と向こうをむいたままで振り返ってさえもらえなかった。

雑草はまるでヘルパーさんに対抗するように、翌日からさらに勢いよく茂り、それが居間からの眺めとなった。

室内は蒸し暑く、三日も雨の降り続いた午後、夫の遺骨を運んでくれた友木から、あれ以来の電話がかかった。

顎紐をくり直した友木は黙々と草を引きはじめた。

昼時になると、ちよつと車の中で昼飯にしますと、家の前に駐車させた車に戻っていった。

退院後、千枝子は勧められるままに、ヘルパーさんの来ない日の昼食を宅配の弁当屋に配達してもらっていた。丁度その車が来たところに友木が出くわし、手渡されたらしく、弁当の入った発泡スチロールのケースを提げて引き返してきた。

「私の車、お宅の前に停めてたので、お弁当屋さんが駐車しにくいみたいでしたから、預かってきました」

「ありがとう、まだ足が不自由だから、こんなお弁当を配達してもらっているの、食欲もなく、たいがい飽きたけどね」

「仕方ないですよ、またそのうち元気になって美味しいものを作れるようになりますよ、あ、よかったら私も車の中は窮屈だから、ここで邪魔してはいけませんか」

「ええ、ええ、かまいませんよ」

千枝子が言い終わらぬうちに友木は車に引き返していき、自分の弁当の入った袋を持ってきた。

「お茶もこのとおり……」

友木は魔法瓶を持ち上げてみせ、奥さんの分もあります、湯呑みだけ持ってきてませんかと言った。

ズボンも脚も汚れているからここで、と友木は尻をタオルでパタパタと叩いてから縁側に腰をおろし、千枝子は傍らの籐椅子に座った。

友木の弁当にはひじきと油揚げの煮物や酢の物らしい蓮根も見えた。玉子焼きに青菜も入っているようで、見栄えもよかった。

「愛妻弁当ですね」

「よかったら、奥さんがこっち食べませんか。私もたまにはかわったものが食べてみたいから、取替えっこしましょう」

友木は、千枝子の宅配のプラスチック容器に入った弁当を手早く自分のほうに引き寄せた。

夫の死を告げられたあと、しばらく食事が喉を通らなくなり、これでは治る傷も治らないと、医師に叱られた。病院食に続き、届けられる弁当は、

「もうすぐお盆ですね、よろしかったらお寺へご一緒しましょうか」

こちらの気がかりを見計らったようなタイミングだった。

翌々日、久しぶりの晴れた日に、市の東部、遺骨を預けてある寺まで、友木の車に乗せてもらった。

車の乗り降りも、本堂に上がる幅広の板の数段も、友木の手を借りた。お経をあげてもらう間、千枝子は住職が用意してくれた椅子に座らせてもらい、友木はその足元の座布団にいた。

盆明けに正式にこの寺の納骨堂に一基を買うことで話が運び、住職に見送られて外へ出ると、掃き清められた境内の一隅に大きな菩提樹があり、そこから夥しい数の蟬の音が聞こえた。

駐車場までの僅かな距離を、そろそろと歩いただけで汗が吹きだし、千枝子は倒れこむように後部座席に座った。

「今日はほんとにありがとう。ずっと気になっていたの」

「いえ。いつでもどんなことでも遠慮なくまたお呼びください」

友木は愛想良く言い、前を向いて運転をしている首を軽くこちらに振り向けた。

「草取りなんかもお願いしたいのかしら」

「ええ、もちろん」

電器メーカーにお勤めだったそうね、と紹介してくれたおばさんから聞いた通りに言うと、ええ、と短く答え、しばらく黙った。

「会社は辞めましたけど……」

信号が赤になった。並んで停車している隣の車の助手席から耳の長い犬が舌を出してこちらを見ている。

「在宅で出来る仕事を少し回してもらってます。夜中にまとめてパソコンで処理しています」

つまりその仕事だけでは食べていけず、かと言って便利屋稼業も千枝子のような客がそう毎日いるわけでもなさそうだった。

翌日、さっそく友木が来てくれた。門扉の横の茂るにまかせた繭^{もち}の木を枝を払い、庭にまわって垂れ下がった木香薷薇の枝も切り落としてくれた。それだけでも見違えるようにさっぱりとした。それから、ツバ広の帽子の

毎日似たようなものだった。生きていくために食べるのだから、ほとんど餌みたいなものと諦めてはいたが、久しぶりの友木の心遣いを有難く食べた。大げさでなく、おいしい物を食べるのは幸せのひとつなのだということを思いださせてもらった。早く自分も台所に復帰したいと少し元気が出たような気がした。

「ああ、美味しかった、友木さんの奥さんはお料理が上手なのね」

「いえ、家内じゃないです。それ、うちの母親が作りました」

悪いこと言っちゃった、友木さんはまだ独身だったのかしらと肩をすばめて黙った。

「いや、いいんです。七十四歳の母親が作ってくれた弁当です、家内は、今、入院しています」

もう一度、あら、と呟き、千枝子は、ごめんなさい、と続けた。

「いえ、かまいません。妻は一年前に蜘蛛膜下出血で突然意識を失ったまま、回復しません。いまま病院にいます」

友木は箸を持つ手をとめると首に巻いたタオルの端で額の汗を拭いた。

手術をした右脚に力を入れないように用心して立ち、ゆつくりとカーテンを引いた。昨日までの草の茂みに慣れた目に、友木に除草してもらった庭はすがすがしい。

時間をかけてゆつくりとサンダルを履き、庭におりる。去年の零れ種から咲いたビオラの花を、友木はちゃんと選り分けて残してくれた。紫と黄色の蝶のような花が点々と足元にある。屈んでみたいがまだ怖くて腰を曲げる事も膝を折ることもできない。棒立ちのまままだただ眺める。

数年前、まだ長崎にいたころ、庭で採取したコスモスの種や、いくらでも増えるオキザリスの球根を持って夫と二人、近くの河川敷まで行ったことがある。千枝子が堤防の斜面にそれをばらばらと撒くのを見ていて、夫が、花咲か爺さんとは言うけど、今日のあんたは、花咲か婆さんだと、秋の陽にふさわしい穏やかな声で笑った。

つぎの年、堤防へ行くと、それが自分が撒いたものかどうか確かでは

ないが、ひよろひよろと丈の高いコスモスが一叢、風に吹かれて咲いている。

あのときは、いつも頭から離れない遼への憂いから少しだけ開放されたような気がした。

白い雲が動いていくのを見上げていると、この雲の先のどこかで遼が無事であることを信じられるような気がして、どこに種が落ちてても花を咲かすコスモスの動きに慰められたものだった。

福岡に夫の転勤が決まったとき、まず思ったのが遼のことだ。いつ遼が帰ってくるかもしれない。母親の自分がこの長崎からいなくなるわけにはいかない、夫に、単身赴任をしてもらいたいと言った。夫は、もう諦めろ、とひとことだけ言った。話すとき辛くなるので、もうその頃の二人は遼の思い出話をするのはほとんどなくなっていた。遼のことに触れそうになると、暗黙の決まりごとのように、どちらかがさりげなく話題をかえた。

長年住みなれた長崎では、幼稚園から高校を卒業するまでの遼のことを知っている者も多く、たまたま出会えば、遼クン、どうしていますかななどと無遠慮に声をかけてくる人も少なくなかった。当然のことだろうが、踏み込まれてくるようで嫌だった。訊かれたくなかった。

知っていたらこっちが教えて欲しいわ、と理不尽を承知で叫び出したくなるのを堪え、目を伏せた。

だから長崎を去ることになり、心残りはあるながら、どこかで開放されたような思いがなくなかった。福岡に来てからは、あえて交際を限定するような気分でひっそりと暮らした。

それ以来、千枝子は心がけて互いの事情に深入りしない人間とだけ交わってきた。入院で千枝子が留守の間、草ぼうぼうになっている家の前を通り掛かった人たちは、いったい、この家に何ことがあったかと思ったかもしれないが、言い訳をしないといけない相手がいないのは気楽だった。

雨あがりの湿った黒い庭土を見ていたら、急に花を植えてみたくなり、友木に電話をかけた。

唐突な依頼だったが、今日は一日何の予定も入っていないから大丈夫と

友木はにっこり笑うとバインダーに閉じた請求書一覧に日付と開始時刻、終了時刻を書き込んだ。

ああ、やっぱり、と千枝子は思う。俯いているその横顔が、遼に似ている。あれから十二年、遼は友木の六つ年下三十二歳になる。大人になった遼を見てみたい。劇場で遼の後ろを小走りについていった女がいたそうだが、少年だった遼はきつと魅力的な男性になっていることだろう。早く元気に歩けるようになり、また遼を探しに上京したい。

「忙しそうね、残念だわ」

「換気扇の掃除を頼みました。すみません」

友木は、腕の時計を気にしながら帰っていった。

今度は友木に何を頼もうかしらと思う。

介護のヘルパーさんが週二回、買い物と掃除をしてくれる。骨折する以前、夫と二人で暮らしていたときより掃除は行き届いている。友木に頼む仕事がだんだん見当たらなくなる。

ヘルパーさんが来る日はなんとなく面倒で気が重いのに、友木が来ない日は寂しい。

そうだ、夫の部屋の片付けを頼もう。

夫も自分もとくに信仰する対象を持っていなかった。仏壇は、買ったところで遼の居所が不明なのだから、この先どうなることかわからないので、まだ買っていない。音楽好きだった夫のオーディオセットの上に写真を置き、ときどきCDをかけて聴く。

バツハはね、難解だと言われてるけど、ぼくにはどれもとても気持ちよく聴こえるんだ。

夫が言っていたとおりで、千枝子もバツハが好きだ。ミサ曲の通奏低音、チェンバロの音色を聴いていると、気持ちがよくなりすぐ眠くなる。ゆっくりと紡ぎ出されるコラルの旋律に、自分の悩みや哀しみが、実はそれほど重荷でなく、いずれにしろ、そう遠くない日に、宇宙の塵に戻っていけるような安らぎを覚えながら微睡む。

気がつくとき、いつのまにかCDは終わっていて、電源の小さなオレンジ色のランプだけが点っている。夫はどこへ行ったのかしらと呆けたように

のことで、早速迎えに来てもらい、ホームセンターまで車に乗せてもらった。

苗を見る前に店内をまわり、足拭きマットと、立ったままで絨毯のゴミを取る柄付きの粘着テープを買った。

青い模様の外装紙に包まれ、高く積み上げられたトイレットペーパーの横を友木に支えられながら歩いた。家から出られず、仕方なく通販で買ったペーパーが当分使いきれないほど納戸に仕舞ってある。いくら安くても、もう要らない。

冷蔵庫の脱臭剤と香りのよい洗顔用のクリームを買った。

花の苗売り場は心が弾んだ。星形に咲くブルースターの蕾は堅く淡いピンク色をしていた。可憐なものをを見ると、胸のどこかがまだ弾む。

花の色を美しいと思う、花卉の薄さをいとおもうのは人間だけかしら。牛にモーツァルトを聴かせたら乳の出がよくなるというから、案外、犬や猫だって花が好きかもしれない。

ブルードイジーや燃えるように赤いサルビアの苗を、友木に籠に入れてもらった。

買い物ってこんなに楽しかったかしらと思う。レジに並ぶ友木の汗ばんだ薄いシャツの背中を見ながら、千枝子は少し離れたところで杖について待っていた。

不運の続く日々、この先、生きていく気力も楽しみも失せたと思っていたのに、こうして強い陽ざしに照らされながら、どこかうつとりと友木を待っている。人間は結構しぶといものだと思っしながら安堵する。

「あ、奥さん、これお釣ります」

レシートと一万円からのつり金を、友木は千枝子に差し出した。

友木の日当は月末にまとめて清算することになっていた。

千枝子の庭に戻り、買ってきた苗を手際よく植え込み、如雨露で水をかけるまで、車に乗せてもらってからすべて終わるまで二時間半、友木は骨身を惜しまずよく働いてくれた。もっと引き止めておきたかった。

「ご苦労様、お茶がいい？ それともコーヒー？」

「いえ、さっき携帯に依頼が入って、今からもう一軒まわることになりました、私はこれで」

思い、ああ、もういないのだったと、また血の引くような寂寥感の中に落ちていく。

読書家だった夫が溜め込んだ本は本箱に納まりきれず、床の上にも積み上げられたままになっていた。

片付け終わった友木が、ダンボール箱に入れた雑誌類を車庫の脇まで運んだ。次回、町内の廃品回収日にまた来てくれることになっている。

「助かるわ、私一人ではどうしようもないわ」

「そう言っていただと私も嬉しいですよ」

友木はいつものバインダーを広げ、時刻を書きつけて千枝子がサインをした。

「奥さん、あまりじっとしていると身体に毒ですよ。今夜は市民まつりの花火大会があります、丘の上まで車で行くときよく見えます。行きませんか」

サインを終えた千枝子からボールペンを受け取りながら友木が誘った。

「それも請求書がくるのよね」

冗談めかしたつもりだが、友木は、すみません……と肩をすぼめ、小声で詫言った。

「いいのよ。行きましょう」

詫言られたことで千枝子の方が狼狽えた。彼を困惑させずに付き合おうと思った。

断わったらこれから来てくれなくなるような気がした。もうこれ以上、何かを失いたくなかった。すぐ支度するわと言った。

走り始めてすぐに渋滞に巻き込まれた。長い信号待ちをしていると遠くに花火の音が聞こえた。

「これじゃあ丘の上に行くころは花火が終わってしまう、すみませんが方向をかえます」

友木は、わき道に入り、くねくねと路地を抜けると小高い崖の縁に出た。

「少し花火には遠いけど、ここからでも結構見えますから」
車一台がやっと止まれる狭い空き地に強引に駐車をすると、友木は千枝子の座っている側のウインドーを下げた。

クーラーの効いた車内にねっとりとした外気が流れこんできた。
崖の下にある民家の屋根やビル群が花火が上がるたびに、ほんやりと光った。夜空につぎつぎに打ち上げられる花火はしゅるしゅるっと音を立てて崩れ、極彩色の輪を広げて見せた。

遠くに見える花火はひどく現実離れがしていた。美しいというよりも哀しく、なぜだか急に胸が締め付けられるようで助けを求めるように友木を見ると、彼はハンドルに顎を乗せてなんだかつまらなそうな顔をしている。

いつも陽気に話しかけてくれる友木が、何か物思いにふけるように、黙って腕の中に顔を伏せるように俯いていた。彼はいま花火にも千枝子にも少しも興味を示していなかった。二人きりの花火見物、もう何かを期待する年齢ではないけれど、千枝子の中にあつた多少浮き立っていた気分が急速に萎んだ。

そろそろ帰りましょうか、と千枝子が言うと、そうですね、と友木は待っていたように同意した。

くねくねとした坂道を用意深く下り、広い通りに出たところで友木の口から遠慮がちな短い溜息が洩れた。

「どうかしましたか」

「あ、すみません。子供のころ、母と一緒に花火を見た日のことをちょっと思い出してました。朗らかな母親なんです、ほんととは病弱でしてね、何年か前に、子宮も胃も摘出して、いま、お腹の中はカラッポなんです」

「まさか」

「おまけに、いつ爆発するかわからない腹部動脈瘤だけは持っています」
手術中に破裂すれば命に関わるもので、医者はリスクが大きいと言って手術をすすめないのだという。

べつに動脈瘤だけ大事に取ってあるわけではないんですが、と友木は笑った。

「笑い事じゃないわね」

千枝子は助け舟を出すように言った。

事故死した夫への賠償金のこと、先週、保険会社から電話がかかった。夫本人がかけていた生命保険からも纏ったお金がもらえるようだが、千枝子はその遣い道もとりにあえずは思い浮かばない。外出もままならないし、あらゆる欲望が薄くなっている。

一人では遣いきれないほどのお金を上げたくても、遑には届かない。

「奥さんは、夜が長くてつらいと言ってましたね」

伏し目がちに友木が言った。

「ええ、家中の灯りをつけても闇に閉じ込められていくようで息苦しくなるの。もっと規則的に暮らさないとけないとわかってるんですけど。」

睡眠薬を飲んで寝ても眠りの底の方にある黒い塊が重くてつらいの」

「私の母は、私と話しているとすぐ眠くなると言いますよ、あんたの声は気持ちが良いって……。ミッドナイト・コールでもしましょうか」

「まあ、本気？ ご商売上手ねえ」

まったく抜け目のない男だ。

気をつけよう、オレオレ詐欺と訪問販売。

先週、町内会からまわってきた回覧板の文字が頭の隅をかすめた。

前頭前野では用心しないとけないと理解しているのだろうが、制御不能のように口元が僅かにゆるみ頷いてしまった。

秋は少しずつでなく、急にやってきた。少しずつ近づいていたのかもしれないが、ある夜、急に足の指先が冷えて身体が震えた。

時計を見ると、いつものナイト・コールの時刻をとくに過ぎている。

夜が更けてきたのは外の気配でもわかる。雨戸を閉め切つていても道路に軋むタイヤの音や寝静まった家々の静寂が伝わる。

友木さんたら、ミッドナイト・コールの遅刻だわ、と思い、熱いお茶が飲みたくて薬缶に水を少しだけ入れてガスを点火した。

筆筒の一番上の引き出しから厚手のソックスを取り出したとき、コンロの上の薬缶がピーピーと沸騰を知らせた。濃いお茶は眠れなくなるので、ほんのひと抓みの茶葉で淹れた熱い番茶の湯飲みを両手に持ち、もう一度時計を見る。

「ええ、七十過ぎまで生きられるなんて誰も思っなくて、だからでしょうね、うちのヨメさん、とても母を大事にしてくれました」
「今どき感心な奥さんだったのね」

「ええ、元氣だったその家内が倒れて、病弱な母がヨメを見舞うことになるなんて、全く思いもよらぬことでした」

笑っていた友木の声が急に潤んだ。

街を歩いているとき、バスに乗っているとき、買い物中、そばを行く他人はたいがい何事も無い顔をしている。連れと笑いながら喋り、楽しげだったり、忙しげだったりする。千枝子は、原因もわからず息子に去られた自分が、誰よりも不幸だと思っていた。その上、夫まで交通事故に遭うなんて、至極不当な扱いを受けているような気がしていたが、友木だって、いつもは明るく振舞っている。人は幸せそうに見えても案外わからなくて、みんな何ごとかを抱えているのかもしれない。

みんなつらいんだわねえ、と千枝子は、ふっと友木に告げたくなったが黙っていた。ほんとうにつらいことは口に出すことで、さらに心に深く杭を打ち込むことになる。

家まで送ってきた友木は、暗がりの中で鍵を開け、千枝子の肩を抱くようにして玄関を入った。齡をとってからの夫にはなかった男の匂いがした。ただ人恋しくてしがみつきたい衝動にかられ、支えてくれている友木の身体にそっと体重を預けた。

骨格の確かな腕が、千枝子を一瞬、強く抱いた。小柄な千枝子の頭の上に友木の顎があたった。どれだけそうしていただろう、痺れたような頭皮の上で、友木の顎が震えた。泣いているのかしら、と思ったが確かめられないうちに、友木はそっと身体を離れた。

何事もなかったように、電話台に置いてあるリモコンでエアコンの操作をしたあと、友木はいつものバインダーを取り出し、一時間四十五分と追加を記録した。

「すみません」

擦れた声で聞き取れないように小さく言い、ちよっと目を伏せた。

「いいえ、好意とか奉仕とかって受ける方が結構負担だから、払えるものなら払って解決するほうがこちらも気楽でいいのよ」

約東のコールタイムから一時間半も経つのに電話はチリとも鳴らない。事はいつだって、ある日突然、前ぶれもなくやってきて、馴れ親しんだ日常を揺さぶる。前もってこつこつと後ろから近づき、優しく肩を叩いて知らせてくれたりはしない。

遑のことだって、後で考えれば、じわじわと前ぶれはあったのかもしれないが、そのときは気がつかなかった。あのころまだ携帯電話など今ほどでなくて、浪人中だった東京の遑の部屋には固定電話もなかった。

緊急時はアパートの大家に連絡することは出来たが、遠慮していた。若い男の子が一人暮らしをはじめたのだ、親離れは当然の時期なのだろうと考えた。

それ以前から少しずつ連絡が途切れがちになっていたが、それまで親に心配をかけたことのない息子だったから、甘く考えていた。

向こう側ではじわじわと進行していた変化でも、ある日を境に居るべきはずのところにはいないと気づいたのは突然だった。上京してみると、アパートは引き払われていた。予備校には随分前から通っていなかった。

警察に捜索願を出したが、受理され登録されただけで積極的に探してくれるというようなことはなかった。

渋谷の雑踏の中で見たという友人の情報もあり、その数年後には京王線の車内で吊り革を握っているのを、人の頭越しに見たという話も聞いた。死んだのではなく、生きて普通に暮らしているのだとしたら、親が心配するくらいのは遑にだってわかつているはずだ。それでも連絡してこないのは、親は見捨てられたということになるのだろうか。

殺人事件で一番多いのが親族どうしで、子供が一番殺したい相手は親だと何かで読んだ。

そうか、親を乗り越えないと生きていけない遑は優しすぎて、親に反抗も出来ずに逃げて行ったのかもしれない、あの子の気の弱さはどこかで自分の育て方が悪かったのかしら、などと自分の子育てを悔やんだ。

遑を妊娠中、お腹の中の子はてっきり女の子の子と思こんでいた。今のようには生まれる前から性別を告げられることはなかった。リカちゃん人形が流行っていた。女の子だったら、リカちゃんて名前をつけたかったの、と幼い遑に言ったことがある。

「ぼく、女の子の方が良かったの？」
問い返した遼の目の、わずかな翳りを思いだしたのは、おかしなことにこの頃になってからだ。覚えていないはずのない三十数年も昔の幼い子供の目の色に千枝子は怯える。

遼くんはおとなしく聞き分けが良い子だと自分に都合よく解釈していた。今になって後悔する。迂闊な話である。

子供のころから口数の少ない子ではあった。長崎で、すべりどめに受けた地元の私大に合格したが、東京に出たいと、珍しく言い張られたとき、この子を手元から放して育てるのも親の務めと決断した。あの判断は間違っていたのだろうか。

友木からのナイトコールは十二時を過ぎてもまだ鳴らない。

三日経っても友木からの連絡はなかった。四日目の午後は、前から夫の古いLPレコードの処分を頼んであった目だ。一時の約束が三時になって来ないので、こちらから電話をしたが、友木の携帯は伝言メモになっていた。

長崎からこちらへ移転するとき、要らないものは随分捨ててきた。ゴミの処分代だけで十万円近くもかかった。

骨折入院、夫の死に見舞われたいま、まだまだ不要な品々に囲まれて暮らしていたことに気づく。

長崎からの引越しのとき、あれだけ捨てたのに、人間が生きっていると雑多なものが降り積もるように身の回りを埋めていく。身体が不自由になり、行動が狭められた今はなおのこと何にも要らないと思う。

生きている間に少しずつ片づけておかないと、いずれ帰ってくるかもしれない遼に迷惑がかかる……。千枝子の気持ちは、帰ってくる……。から、いずれ帰ってくるかもしれないに、いつの間にか変わっている。

以前、家出入の相談窓口で、連絡が途絶えて十年を過ぎると、亡くなっている確率も低くはありません、と言われた。子供の遼が自分より先にこの世からいなくなるなど、どんなに連絡が断たれていても考えたくない。

子を産んで、子に去られ、なんだかよくわからないうちに自分もいずれこの世からいなくなる。それでも空や海だけでなく、街だって道だって世の中はそれほど変わりにくく、いつものままだろう。夫の死も遼の行方知れずも、千枝子の心にあるだけで、すでにこの世のどこかに吸収されたように何事もないように日が過ぎていく。

夫の部屋に入った友木が、千枝子から視線をそらすようにして、古いレコードの仕分け作業に入った。ぜんたいにうつすらと黴が浮いている。

「なんで十日も連絡をしなかったんですか」

この言い方はいけない、不平らしく押しつけがましい、自分に友木を責める資格などあるわけがない、わかっているのに、止められない。

遠い場面に似たような事があったような気がする。どこか霞みはじめていてもどかしい。

遼は何から逃げたかったのだろうか。どこへ行ったのだろうか。

今さらわかったところで、遼が戻ってくるとは限らないのに、また思う。

収集家を探しているというリストの一覧を片手に友木はレコード盤を整理している。マニアがいてお宝になる盤もたまにはあるのだという。

千枝子はいつも夫が座っていたロッキングチェアに座り、そこから見える庭に目をやる。丈をのばした紫色の野ボタンの花弁が見えた。その後ろに伸びたススキの穂が陽炎のように白くゆらりと動いた。

油断も隙もないわ、ついこの間、友木さんに草を抜いてもらったばかりなのに、いつのまにあんなススキが茂ったのかしら、もうとても太刀打ちできないわ、降参だわね、と千枝子は呟き、いったい何に降参なのか自分でもわからない。

友木が今日は無言なので、傍にいる友木にまで見捨てられたようで、生きていくことと死ぬことの地続きのところで降参して揺れているしかないような気分だ。誰もいなくなり、草に囲まれたこの家で草の勢いに飲まれていくような息苦しさに潰されそうだ。

捨てるために括り終えたレコード盤を前に、友木が、あの、と言った。

「はい」

「長く連絡もしないで、ほんと、すみませんでした」

十日ほど過ぎた午後、あれきり電話のなかった友木がいきなりチャイムを鳴らして玄関に立った。

「まあ、何度も電話したのに心配するじゃあないですか」

整える暇もなかった髪に手をやりながら咎める口調になった。

「すみません」

しばらく顔を合わせなかった友木は、痩せて一回り小さく萎んで見えた。

「どうかしたんですか」

答えずに友木は、失礼します、と靴を脱ぎ、勝手のわかつている夫の部屋へ向かうとして、そこにいる千枝子の傍らを目をそらせてすり抜けようとしたり。デニムのシャツの背中が、遼が居なくなる少し前から見せた仕種によく似ていた。

こちらの衣服にさえ触れたくないというその仕種は、心に触れられたくないことを抱えていたのだとは遼がいなくなった後で思ったことだった。

長崎の遼の部屋には、まだ彼のデニムのシャツを吊るしたままだ。ことさらに肩を張るのが癖だった遼のシャツは無人の家で今も肩を怒らせていることだろう。

遼くん、とクンをつけて呼ばれるのも、今夜、遅いの？ と訊かれるのもいやだったのかもしれない。

シニールな芝居が好きで、何かの宗教に熱心だという折れそうに痩せた女の子と連れ立っていたという遼は、いまでも千枝子に何かを訊ねられるのを恐れているのだろうか。

朝、送りだすとき、気をつけて……。と言ったら、何を気をつけるの？ と珍しく苛だったように振り向いた日があった。

忘れることはなくても、いないことに馴れて、遼がだんだん遠くへ行ってしまう。思いだすと苦しくて、逃れたいくせに、馴れて自分の胸のうちからさえ離れていくことは耐え難い。

自分の骨折と夫の死、思いがけないこと、自分の身にだけは起こりえないと根拠なく信じていたことがごく当たり前のようによつてきた。先という日はそれほど与えられていないのだとつくづく思い知らされた。

あらためてというように友木が床に正座した。膝の上の拳が小刻みに震えている。

「いったい、何があったんですか」

「実は……。家内が亡くなりました」

「あら」

「いえ、ずっと悪かったですから……。覚悟はしました。今日か明日かと毎日そんな状態でした。人間は毎日どこかで誰かが死んでいて、珍しいことでもなんでもないと分かっていたことなのに、自分のところに順番がきて、はじめて、人はほんとに死ぬんだなあって……」

「まあ」

千枝子は何も言えない。

しばらく二人は黙ったまま、うな垂れて座っていた。

気を取り直すように友木が膝を崩し、胡坐に代えて、気弱く笑った。

「なるべく傍にいてやりたくて、会社辞めましたけど、オムツ代だけで、月に四万円、病院で指定された業者からしか買わせてもらえなくて。何もかもが割高でしたが、長い病人でしたから、出ていけと言われたくないいいなりでした。つい、奥さんに甘えました。さぞ、がめつい奴だと思われたことでしょう」

ズボンのポケットから皺だらけのハンカチを出して、額を拭いた。

これ……。と目の縁を赤くした友木が夫の机の横の古いラジカセを持ち上げた。まだ充分使えます、明日からいつもコールしていた夜の十時、ラジオが鳴るようにセットしておきます。うちの母がよくこの番組を聞きながら寝ています。ここを押す、ここを止める……。だけです。もうこれ有料でないですから。またわからないときは電話してください。すみません。友木はまたすみませんと繰り返し、銀色の小型カセットを千枝子の前にさしだした。

ラジオくらい、自分で操作できるわよ、有料でも、あなたの声が聞きたかったのよ、と拗ねたように思いながら、友木の丸っこい指先を見ている。た。

「母が……」

丸っこい指は、カバンのジッパーに手をかけたが、いつもの請求書の記

第4回 全国同人雑誌最優秀賞 まほろば賞 公開選考会

201010月31日 AM9時

同人雑誌最優秀作品を自らの手で選ぼう

あなたも選考委員

同人雑誌界のエポックを

会場●徳島県三好市ホテル・サンリバー大歩危 おおほけ

全国同人雑誌振興会・文芸思潮

富士正晴全国同人雑誌フェスティバル

協賛●作家集団「塊 KAI」

参加費●無料 (候補作品を読んでいただくことが必要です)

※候補作は「文芸思潮」35号・36号に掲載 詳しくは63Pを

参加申込 TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848 文芸思潮

メールでも受けつけます asiawave@qk9.so-net.ne.jp 宿舎も手配します



和田信子

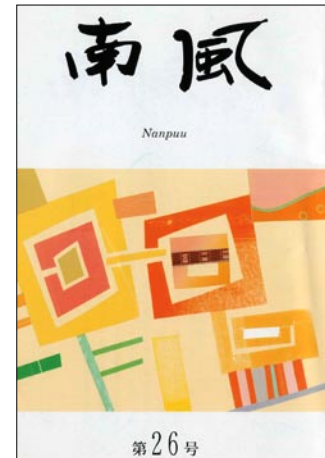
わだ のぶこ

1938年生まれ 東京都出身

1961～2年頃、日本文学学校に学ぶ
福岡市在住

1996 南風の会入会

南風6号より毎号同誌に小説を発表
今に至る



録は出さず、そこに提げたオランダ人形のキホルダーを弄んでいた。
「妻が亡くなったことを私が嘆くと、代われるもんなら代わってやりたかったと泣くので、私は嘆くことも出来ないんです。代わってやりたかったと言われると腹が立ちます。代われっこないんですから。だけど、正直、やっぱ順番に逝ってもらいたかったと思います」
樹脂製の小さな人形は友木の親指と人差し指に挟まれてくにくくにゆと揉まれている。
「私も寂しくなりました。また時々、伺います。奥さんが元気になったら、坊ちゃんを探しにお伴しますよ」
それから、ふいと立ち、奥さん、だいぶ涼しくなりましたよ、閉め切っていないで、そろそろエアコンを切って窓を開けませんか、庭を向いた広縁のガラス戸を引いた。
微かな風に草と土の混じった匂いがした。



「文芸思潮」現代詩人賞 受賞
少年期のみずみずしい自然は時を越えるからこそ、いっそう清流の匂いを孕んで、耀き映える。佐山広平氏の詩は、時の激流の上に架けられた、光のきらめきの海を渡ろうとする永遠への橋だ。少年のみずみずしい眼差しが、彼岸を貫こうとする。
「文芸思潮」五十嵐勉

文芸思潮現代詩人賞受賞
佐山広平第二詩集
時の彼方へ
みずみずしい少年期の自然が、きらめく現実の輝きとなつて蘇る！
ほとばしる鮮烈な言葉に、時の彼方へ渡るまぶしい橋が架け渡される。
税抜一〇〇〇円
ご注文はアジア文化社へ